特集＝ゴルバチョフ訪中と中国変動

中国の悲劇とその背景

中嶋嶺雄

四・五月革命

今回の一連の民主化運動、そして流血の悲劇というプロセスを、私は「四・五月革命」ととらえている。いずれは、中国の民主化運動の当事者や歴史家がなんらかのそれにふさわしい呼称を与えることになるだろうが、現時点ではそう考えてよいのではないだろうか。というのは、今回の事態が中国の共産体制下におけるもう一つの革命の始まりであったという感じがするからである。

まず事態を分析してみると、その根本は共産党の一党独裁体制、ある意味では〝もう社会主義はごめんだ〟という根本的な体制批判であると同時に、長期的な体制改革への一つの芽を含んでいたのではないか、と思われる。もちろん、明確な指導者がいたわけではないし、ある種の組織論に基づいて運動が展開されたとも思えない。その点で、「四・五月革命」はその初発において敗北の運命を余儀なくされていたと言えよう。しかしながら、それが持つ歴史的意味は非常に大きいのではなかろうか。もしかしたら、かつての「五・四運動」を上回る大きな歴史的意味を将来の中国にもたらすかもしれない。

ひるがえってみると、こうした運動はこれまでにも多くの敗北と挫折をこうむってきている。その瞬間においては敗北し挫折しているにもかかわらず、やがて大きな歴史的な変化の文脈を作っていくものではないだろうか。

かつての「五・四運動」も、一九一九年に三〇〇〇名の学生が立ち上がって起こしたものである。これは当時の学生の規模、北京の人口に比較すると大変な数である。奇しくも、今回の「血の日曜日」になっていった同じ六月三日には、労働者たちも加わってストライキ闘争が起こったが、それをピークに挫折し、中央・地方の軍閥によって抑圧された、という歴史がある。もっとさかのぼれば、パリ・コミューンも一時はパリの市街地を、しかも近郊の労働者や市民が解放区のように独占したものの数十日の運命に終わった。しかしながら、第三共和制を開く端緒になったということからすると、今回の「天安門事件」は流血の惨事をもたらしたけれどもやがては中国を大きく変えていくことになるのではなかろうか。

その意味では、事態の本質はカウンター・レボリューションだったと思う。カウンター・レボリューションという言葉は、ある意味では反革命を意味するが、これは鄧小平氏が言っているような反革命ではなくて、反・革命と考えたほうがいいのではないか――ここのところをどう摑むかが、今日の事態および今後の中国を考える基本的なポイントだと思う。

もちろん、学生たちがそこまで明確に自覚していたかどうかは、非常に疑問である。むしろ一種の市民革命的な、あるいは知識人や学生が中心となった知識革命的な要素があった。そうであるがゆえに、当面の敗北であるにもかかわらず歴史的意味が非常に大きい。

また、学生たちが事態の重大性にどこまで気がついていたか。これはある意味では、権力の暴虐、軍事力を持った強権体制、とくに共産党独裁体制では最終的には鉄砲がすべてを支配する、という自覚を持っていなかったと言えるかもしれないが、それだけに、この運動の底流には「共産党ではもうダメだ」という、意識的・無意識的な大きなコンセンサスができていた、と言えよう。

当面の強権政治や恐怖政治の断行によってますますそうした事態が進行していくであろうから、この流れはもう抑えることができない。当面はそうした反・革命は沈潜していくと思われるが、ますます中国社会に広がっていくことになろう。したがって、これを単なる民主化運動としてだけとらえるのは、事態の根本的な性格を十分にはとらえていないことになる。のみならず、事柄の性格を矮小化していると言わざるをえない。

日本の新聞その他は、その日の事柄に追われるのに急で、そこまで明確な規定づけをしていなかったようだが、六月一六日号の『タイム』は「レボルト・アゲインスト・コミュニズム(共産主義への反乱)」と表現していた。

アジアの周辺諸国も、社会主義圏以外は全部工業化への過程にあるし、そうした社会は一部の支配階級が圧倒的な飢えたる大衆を支配するという構造ではなく、広範な中間層が存在して、大変に富んでいる人がたくさんいるというのではなく、また大変に貧しい人がたくさんいるというものでもない、いわば成熟社会に入っていっているわけである。したがって、経済の平等はマルクス主義では実現できない、ということが実証されたと見てよい。

「いや、社会主義ももうちょっと改革すればいい。いまの社会主義が悪いのだ」と考える人もあるだろうが、もはやそういう時代は終わった。むしろ、社会主義は、いかに不平等であり、いかに非生産的であり、いかに非人間的であるか、ということが経済社会の大きな文脈のなかで実証されている。

こうしたことを考えると、社会主義が目標とした経済の開放はマルクス主義に基づくところの計画経済ではとても無理である、ということが歴史の実験として証明されてきている。

また、マルクス主義の大きな課題である民族問題にしても、レーニンの民族理論によれば、民族の自治・自決が大きなテーゼであり、勝利したプロレタリアートは国境にこだわらない、民族はみんな平等に花開いてそれぞれの文化

共産主義への反乱

もう一つ興味深いのは、中国で血の粛清が行われているときに、ポーランドではワレサ委員長が率いる「連帯」が選挙で大勝するという、これまた大きな歴史が始まっていることだ。ひょっとすると、四年後の自由選挙では「連帯」が圧倒的な勝利を博するのではないか。そして、下のほうからの民主化措置によって社会主義体制そのものが崩れていくかもしれない。

いまや成熟した社会主義からもう一度時代の針が逆回転して、なんとか社会主義を離脱する、共産主義の軛から脱するということが革新であり、歴史的進歩である、という時代が始まろうとしている。一九世紀のグランド・セオリーであるマルクス主義は、二〇世紀の国民国家レベルの実験を経て、かんじんの経済の開放もうまくいかない、いまや革命を経ない社会のほうがはるかに豊かになっているという現実に耐えられなくなってきている。そして、革命権力の下にある社会は、どこも経済がうまくいっていない。非常に低いところで低迷しているのみならず、その低いところにおいて貧富の格差がものすごく増大している、という現実がある。

が競い合う、と言われたが、果たしてそうなのか。いまの社会主義のソ連を見れば、いかに民族問題がシリアスであるか。また中国においても、あまり目立たないが少数民族地域、たとえばチベットの状況を見ればそれは歴然としている。

さらに社会主義になると資本主義の軛における疎外現象もなくなり、国家もいらなくなる、と言われたけれども、今日の中国ほど国家が大きな顔をして庶民の生活・人権あるいは命をも左右している国はない。われわれ日本人は国家をあまり感じないで住んでいるが、いま中国の人びと、あるいはデモに立ち上がった学生たちは、本当に国家に恐怖感を抱いている。

これだけ事実が挙がっているにもかかわらず、なんとなくまだ社会主義に幻想を持っている人がいるとするなら、その人は本当に誠実なのかどうか疑わしい。おそらく二一世紀には社会主義から脱することが歴史の進歩になると思う。それをいまポーランドでは実験しているし、中国の学生たちは身をもって体験しようとして条件未成熟で当面の敗北に終わったのではないか。その意味で、今回の事態はまさに「四・五月革命」と言うにふさわしい反・革命であった、と言えよう。

鄧体制に対する不満

さて、次にそうした事態のなかで、今回の一連の激動を分析してみたいと思う。結局中国は、開放されたとか改革されたとか言われながら、いざとなるとむきだしの暴力に今日の政権は依拠せざるをえなかったわけであるから、そのへんの事情を分析してみることにする。

まず、なぜ戒厳令が施かれたのか、という点についてであるが、それには中ソ首脳会談をめぐるドラマから見ていく必要がある。

この五月一五日に歴史的なゴルバチョフ訪中が行われた。北京の天安門広場で歓迎式典を開こうとしたところ、そこには民主化の旗手ゴルバチョフを歓迎して、大変な数の人民が集まっていたために、式典ができなくなってしまった。そこで空港で簡単に済ませて、当日は楊尚昆国家主席との儀礼的な会談を終えた。そして、翌五月一六日午前一〇時一〇分から、懸案の中ソ首脳会談、ゴルバチョフ・鄧小平会談が予定を上回って延々二時間半行われたのである。そして今回は中国の中央電視台(テレビ局)がそれぞれの首脳会談の冒頭を、当初は一〇分という予定だったのを一四、五分公開した。

この鄧小平・ゴルバチョフ会談で、実は中ソ関係のすべての基本的なところが決まった。政府と政府のみならず、党と党との関係の正常化も行われた。そして、冒頭から鄧小平氏は、「三年前にルーマニアのチャウシェスク首相を通じて中ソ和解のためのメッセージを託したが、受け取ってもらえただろうか」と言って、いわゆる三大障害を問題にした。それに対してゴルバチョフ書記長は、毎年一つずつ障害を克服していると答えた。去年はアフガニスタン、今年はモンゴル、中ソ首脳会談の再開に合わせて、モンゴルからの撤兵が開始された。これも、非常に歴史的な出来事である。

日本では、鄧小平がソ連とヨリを戻してもなにもいいことはないじゃないか、だから中ソ和解はありえない、という見方が多かったし、アメリカのキッシンジャーなどもそう言っていたが、中ソ和解を妨げる三大障害を中国が出した時点で、すでに意思決定がなされていた、と見るべきであろう。それは同時に、中ソ和解があっては困るという西側の目を覆うための、中国外交のテクニックでもあったと言える。したがって、この三大障害は、西側へのプレゼントであったことは明らかである。

そして、この五月一五日はモンゴルから五万数千名のソ連軍の新たな撤兵が行われた。私も二回モンゴルにいったことがあるが、中ソ対立の激しかったころはどこにでもソ連軍のプレゼンスが見えたものである。二度目にいったときにはかなり関係が良くなっていたので、ソ連兵がいても和気藹藹としていたものである。とにかく、モンゴルの三分の二の兵力が撤退し、将来全面撤兵するということは、東アジアの内陸部における隠されたテンション（緊張）を大いに緩和することになることは言うまでもない。

それほど密度の濃い内容が冒頭の一〇分ぐらいの間にあった。その場面を見ていて、私はさすが鄧小平だと思わざるをえなかった。非常に堂々としていて、世界のスター・ゴルバチョフも彼の前では先生を目の前にした学生のように見えた。

ところが、この鄧小平に対して、天安門広場を埋めていた学生や市民はなんと言ったか……。「おまえはなにものだ。鄧小平引っ込め」と言ったのである。これは鄧小平にとっては許し難いことであった。彼にとって中ソ関係は、その生涯の半分以上をかけたものなのだから。

かつて一九五六年のソ連共産党二〇回大会で、スターリンがフルシチョフによって衝撃的に批判されて、スターリン時代がガタガタと崩壊していったその現場に出ていたのが鄧小平である。やがて中ソ論争が始まると、鄧小平は一九六三年に中国共産党の代表として当時のソ連のスースロフと渡り合って決裂し、席を立って帰ってくる。そのときの北京空港では、毛沢東、劉少奇、周恩来らが凱旋将軍のように鄧小平を迎えたものである。

ところが、やがて鄧小平・劉少奇と毛沢東との間には、大きな見解の相違が出てくる。その根本的なところは、ソ連を敵と見なして徹底的にソ連と闘うか、論争はするけれどもソ連は敵ではないと見るか——というところにあったのである。後者の立場が鄧小平・劉少奇らの当時の実権派であったが、それを毛沢東は修正主義だと言って文化大革命を発動した。そして同時にソ連に対しては、社会帝国主義・覇権主義として徹底的に批判するだけでなく、軍事的にも対ソ対決のシフトを敷いた。人民解放軍を増強し、「人民戦争の勝利万歳」という掛け声の下で、ソ連と対峙するのである。

そうした中ソ関係も、やがて毛沢東の死とともに変化していく。いわゆる非毛沢東化が起こったのである。しかし毛沢東の国内政策は誤りで対外政策は間違っていないということはありえないわけだから、外に対する政策の根本、つまり対ソ対決路線が否定されたわけである。私はそのころから中ソは和解すると言っていたのだが、残念ながらその当時は少数派であった。

このような歴史を経てこの五月一六日、鄧小平はゴルバチョフを北京に迎えた。彼にしてみれば、思い募るものがあったであろう。ところが、みごとに中ソ会談をやり遂げたにもかかわらず、広場の大衆は「鄧小平引き下がれ」と叫んだ。本来ならば「鄧小平さん、長い間ご苦労さまでした」と、中ソ会談をみごとに成功させた労をたたえるべきなのに、中国の民衆はまったく違ったイメージを鄧小平に抱いていたことになる。そこに、今回の事態の大きな問題点、ないしはそこまで鄧小平の独裁体制が民心を失っていたということが現れていると言えよう。ゴルバチョフが中国にきたことにより、彼は若いということもあり、民主化の旗手ということもあって、鄧小平の存在を改めて考えさせることになった。

ひるがえってみると、鄧小平は党中央軍事委員会主席である。この党中央軍事委員会というのは、中央委員会に所属する機関であるから、いかに軍の統帥権を有していようとも、鄧小平は中央委員会の総書記の下に統括されなければならないはずである。ところが、実際にはまったくそうなっていない。鄧小平は国家の元首でもなければ（国家主席は楊尚昆）、党の書記長でもない（総書記は趙紫陽）。それでは政府の首相かと言うと、それは李鵬であるから、首相でもない。つまり、鄧小平がなぜゴルバチョフと会うのか——。本来その資格がないにもかかわらず、堂々と会っ

てしまうところに中国の政治は鄧小平ワンマン体制であり、まさに「人治」であることが明らかになってしまった。これに対して学生たちは「法治」を要求したのである。

しかも、「法治」の立場に立てば、八二年に採択した新しい中国共産党の党規約第一六条には、「いかなる個人も組織の上に君臨することは許されない」となっている。それを作ったのはほかならぬ鄧小平なのである。

このことからしても、鄧小平には中ソ会談を牛耳る資格はないはずである。これを日本で言うとどういうことになるか。引退した元首相がすべての首脳会談を牛耳っているということになる。中国では国家行事も引退した長老が取り仕切っている。これは民主主義を求める学生たちの意識とは根本的に食い違っている。学生たちにしてみれば、胡耀邦が死んで残念でならない。「早く死んでほしい人はなかなか死なくて、惜しい人が亡くなった」と彼らは言っていた。この認識のズレは大変なギャップである。それをつきつけられたことは、鄧小平にとっては、彼のレゾンデートル（存在理由）を否定されたと同じことであるから、「なにを言うか。おまえたちは反革命暴乱分子である」ということになったのである。

さてそこに、重大な事件が起こった。その日の午後、李鵬・ゴルバチョフ会談が政府レベルで行われた後、夕方から趙紫陽・ゴルバチョフ会談が党レベルで行われた。その席上、趙紫陽は、テレビで全世界に放映され、同時に広場の学生にも伝わることを意識しながら、大変なことを言った。

「鄧小平同志は一昨年秋の一三期中全会（中央委員総会）以来、第一線を引退した。にもかかわらず、みんなが知っているように彼からは離れられない。鄧小平同志の知識や経験から離れられない」

これは、鄧小平をたたえているようでありながら、いかにいまの中国が鄧小平のワンマン体制であるかということを訴えている。自分は党の総書記であるにもかかわらず、すべてを鄧小平が握っていることに対する趙紫陽の不満であったのである。

「そして最も重大な問題については、鄧小平同志がすべて決断することになっている。このニュースは初めてあなたに公開するものです」

これは大変なことを言っている、と私はNHK衛星放送テレビの解説をしていてそのとき思った。これは、ある意味では趙紫陽が追い詰められていて、最後の最後で彼が開き直ったことを示すものだったのではないか。そこで、ビデオをもう一度よく見てみると、趙紫陽は——もちろんこんな大事なことを言うのにテレビの画面に向かってはしゃべれない、ゴルバチョフの顔を見ても言わない、伏目がちではあるが——決してショボショボと言っているのではなく、非常に挑戦的に言っている。

これはなにを意味するか……。趙紫陽は経済政策がうまくいかない責任を取らされて、このところ党内でリーダーシップを弱かされていた。その趙紫陽がゴルバチョフ訪中によってますます高まった「鄧小平下がれ。李鵬打倒」の声に励まされて、彼自身が土壇場で開き直ったものと思われる。これは後に趙紫陽の反革命罪として、「党総書記が党の最高機密を漏らした」ということで、厳しく追及されている。

いずれにしても、これは大変なことである。そして翌一七日、ゴルバチョフは天安門広場で献花をすることもできなかったし、故宮博物院を見ることもできなかった。「北京にいったら、あの中国民族が生んだ歴史的な遺産、文化に接してみたい」と言っていたにもかかわらず、中国文明の粋のような故宮博物院に足を踏み入れることなく、また北京の象徴である天安門広場に足を踏み入れることもなく、予定の変更を余儀なくされて、翌一八日に上海にいって、その日のうちにモスクワに帰ったのである。

このあたりで事態はまた非常に動いてきた。学生デモはますます盛り上がり、それに呼応するように鄧小平のお膝元である党中央軍事委員会とか、人民解放軍の主力軍区であるとか、中央党学校とか、国務院だとかからなだれ現象が起こったのである。そして、鄧小平・李鵬に対する批判が、ゴルバチョフが帰ったときからさらに大きくなった。

しかも、ゴルバチョフが帰った後、北京の警護を任されていた例の三八軍が、どうも改革派に呼応しているのではないかと見られる動きがある。三八軍というのは、中国共産党の最精鋭の部隊であり、いわば王様ブランドの部隊である。「万歳軍」という別名もあるくらい、朝鮮戦争、つまり抗米援朝戦争でも大変な功績を残した精鋭部隊である。この精鋭部隊が胡耀邦の追悼に参加している、ということが北京の壁新聞に載っている。ということは、この三八軍は学生に加担している、ということを意味する。これは大変なことである。

そこで、鄧小平は急遽北京を脱して、一九日に武漢にいき、二二日までそこにとどまった。そして、「自分は党中央軍事委員会の主席である。俺の言うことをきけ」とわめき散らす。この武漢の会議には七大軍区から全部馳せ参じたという情報と、五大軍区しかこなかったという情報とが入り交じっている。

しかも、一九日夕方からの党中央拡大政治局会議で趙紫陽がやっつけられる。どうやら軟禁されたらしいのだが、

それ以来、今日にいたるまで行方不明になっている。中華人民共和国は、共産党が指導する国だと憲法によって決められている。その最高責任者が行方不明なのであるから、本当に日中友好が大事ならば、「趙紫陽さんはどうしているか」ぐらいのことをわが国政府は言ってもいいはずである。たとえ彼がいかに間違っていようとも、次の中央委員会が開かれるまでは、共産党の最高指導者は趙紫陽なのだ。その趙紫陽が行方不明になっているのだから、これも大変なことである。

彼が最後に出てきたのは、学生のところに降りていった一八日の夜から一九日の早朝にかけてである。彼は涙ぐみながら「ここにくるのが遅すぎた。あなた方の要求は当然だ」と言っている。その日に、李鵬は学生と決裂し、趙紫陽は学生に加担して、学生に救援を求めたと言ってもいいかもしれない。

ところが学生たちははじめから趙紫陽を救うために今度の運動をやったのでは決してない。学生たちにしてみれば、趙紫陽だって「官倒」ではないか、ということになるのだ。官倒というのは、幹部の特権化のこと、官僚ブローカーのことである。趙紫陽の息子は海南島の開発会社の責任者だし、娘は北京の一流ホテルの責任者であったりと、一族全部がやっていることに対して、学生たちはうんざりしていたわけだから、趙紫陽は学生にとっては救いの星ではなかったのである。

しかしながらこの時点では、明らかに趙紫陽は民主化をバックに巻き返しを図っている。しかもその波が大きくなったということが、緊急の事態をもたらし、一種の二重政権状況が生じた。そこで結果的には趙紫陽が破れて軟禁状態にされた。このように、まさに食うか食われるかという状況のなかで戒厳措置が施かれたわけである。そして、夜一一時から北京市党・政・軍の緊急会議を開いてそれを追認した。その時点で日本には北京が戒厳状況だという情報が入ってきた。私の家ではこの日の夜一〇時半から一一時ぐらいに電話が鳴り出している。しかしこの時点では戒厳令はまだ施かれていなかったのである。戒厳令が正式に公布されたのは、翌二〇日の午前一〇時である。ということは、戒厳措置が決まったにもかかわらず——本当は戒厳令を布告したら学生を排除しなければならないのに——一〇時間以上もたってから施行されたというところにも、いろいろな抵抗があったことがほのみえる。

党権威の低下

それでは、なぜ六月三日から四日にかけて流血の悲劇が

起こったのであろうか——。私はもう一つのドラマが進行していたのではないかと思っている。

つまり、戒厳令を施いたのに北京の三八軍は動かない。また、北京軍区自体もなかなか動かなかった。三八軍が属する北京軍区が戒厳措置を支持したのは、戒厳令施行後六日目のことである。これは大変深刻な状況である。その上、二一日の午後、三八軍の副軍長が自殺している。軍長は責任をとって、つまり抵抗の意味も含めて辞表を提出し更迭される、ということが起こっている。

ということは、戒厳令施行後もかなりいろいろな抵抗が起こっていたことを示している。そして、この時点になると、軍の長老、聶栄臻、徐向前、楊成武といった元帥クラスの長老が「人民解放軍は人民に銃を向けるな」と言い出す。また、長老の間からは「李鵬・鄧小平はやりすぎているのではないか」という諫言が聞こえてくる。このとき、後で強硬派幹部が揃い踏みをしたときに出てきた彭真も、かなり批判的なことを言っていた。また、陳雲もそうである。陳雲・彭真は、「ワンマンを許してはならない」と言い出した。

鄧小平・李鵬にとってはますます深刻な状況であるが、そこで楊尚昆という、自分の弟や娘婿や甥などを軍の幹部に据えている人物の力に頼らざるをえなかったのである。軍の近代化とは名ばかりの、非常に封建的な要素が残っていたわけである。こうした事態は、戒厳令を施行したほうにとっては、大変な権威の失墜を意味する。戒厳令を施行したにもかかわらず、軍が言うことをきかないわけだから……。そこで、急遽軍をあちこちから動員することになるのだが、これには時間がかかる。

そして、六月初旬になると、〝北京は流行病がはやっている〟〝天安門広場はものすごい伝染病の巷と化している〟といったデマが広められた。中国の人たち、とくに軍人は文盲率が高いし、三八軍のように北京の状況がよくわかっていて民主化の運動もよく知っているような人と違って、迷信にとらわれてパニックを起こす者が多数いるようだ。

そこで、実際にはたくさんの兵士たちを地方から動員して二七軍に混ぜていたと思われる（この二七軍の軍長は、さきの楊尚昆の甥だと言われている）。一説には二七軍というのは石家荘に本拠があると言われているが、どうも田舎から出てきた、北京の状況などなにもわからない人たちが多かったようである。そこで彼らに〝北京は乱暴狼藉、反革命分子が暴乱をきわめている〟という情報を一方的に流して、彼らに「逆賊を討て」と指令を発したのである。そして、伝染病があると言っては興奮剤を予防注射と偽って注射した、というのだが、これもありうる話だと思う。

それはともかく、そのころにはもう天安門広場には学生はいくらも残っていなかった。主として地方の学生らが三〇〇〇名ほど残っていただけなのに、それを排除するために一〇万人以上の兵士を広場に突入させ、各軍区から一、二個師団の兵士を集めたのである。とくに機甲化部隊とか技術部隊のような非常に近代化された部隊まで動員して、北京の近郊まで合わせると三五万人もの兵力を動員した。日本の自衛隊全部よりも多いのである。

こう考えてくると、これは単に学生を押さえるだけのものとは思えない。学生排除なら、人民武装警察（全中国で一〇〇万近いと思われる）や首都衛戍区の部隊が催涙弾や電気銃で処理できるはずである。にもかかわらずそんな大軍を集めたということは、とくに北京軍区あるいは瀋陽軍区のような近代的な意識を持った軍区が、いまの鄧小平・李鵬体制を見放しつつあるのではないか、というおそれもあったのではないだろうか。そして、すべてにおいて鄧小平は過去に自分がやられたことのある恐怖――天安門事件、文化大革命の恐怖――をバネにして、「あいつらは動乱分子だ」と自己規定するのである。そして、それに陶酔して、絶対に迷わない。

こうした状況のなかで、六月二日、人民解放軍の総後勤部において戒厳部隊出動のための会議が開かれた、という。そこでは、楊尚昆・李鵬が中心となって制圧を決める。同時に、軍令状を施行して、これに背いたものは軍法会議において徹底的に処断する、という形でおどかして、さきのように軍を差し向けたのである。

こう考えてくると、今度の事態は強硬派が非常に追い詰められていたことを意味すると思われる。もし彼らに余裕があったなら、世界の目が見ている前であのような流血の惨を起こさなかったはずである。もちろん、彼らが狂ってしまったと言えばそれまでであるが、そういうことをせざるをえないほど、いまの中国共産党の体制は強権的な鉄砲でしか支えられないものになってしまっているということである。大衆的な基盤もほとんどなく、完全に信頼も失ってしまっているのである。

反・革命のルーツ

さて、そこで、今回の一連の事態の背景を指摘しておきたい。

まずなんと言っても、中国の経済秩序が混乱をきわめていた、ということがあげられよう。開放政策になって中国の経済はうまくいっているという議論が、日本にもある。とくにエコノミストや銀行のシンクタンクの人びと、日本政府・外務省がそうであるし、アメリカのキッシンジャーやポール・ケネディなどは、一種の文明論にひかれて、「二一世紀は中国の世紀である」と盛んに言っていた。私はそれらの話を聞いていて、〝一体どこの国の話をしているのか〟と思うことがよくある。私がこの目で見、いつも考え、分析している中国とはまったく違っているからである。

これにはいろいろ原因があると思う。一つには、中国に招待されたり、あるいはアドバイザーの形でいって、一流ホテルに泊まって人民大会堂かどこかで二、三日会議をして、観光地を二、三カ所訪れて帰ってくるからである。こうして大体一週間か一〇間ぐらいのスケジュールならば、〝中国はいいところだ〟と思うのは当然である。

中国にいったら、まず自分の足で地方を旅行してみてほしい。あるいは自分で北京駅にいって、一〇分でもいいから立ってみてほしい。すべての状況がたちどころにわかるはずだ。いかに混乱が激しいか。切符を買うことがいかに大変であるか。それはお偉いさんが住んでいる社会とは隔絶した、とてつもない社会なのである。外国人と見れば闇ドル買いが寄ってくる。乞食も寄ってくる。そして、少しでも切符が買えそうだとなると、ワッと殺到する。

地方の都市でも大体同じようなものである。毎日、数千人が移動している。これは開放政策の反映でもあるのだが、少しでも儲かるところにいこうと、農民がどんどん都市に出ていく。広州などは、この間、二百数十万人も湖南省、四川省から出てきて、パニックになっている。それに対して、鉄道や通信網は旧態依然なので、混乱が起こるのは必至である。また、開放経済をやったけれども、経済の土台ができていないところに、急速に西側化して市場原理を入れようとしたので、混乱のほうが大きい。

また、鄧小平の時代になってから、人民公社を解体して個人農にしたのだが、そのために、農産物の統一買い付け価格を大幅に引き上げた。平均三〇パーセント以上の「飴」を与えた。それは当然、国家財政の赤字になる。国家財政が赤字になれば、人民元を大量に発行する。そのうえ、最近は外貨がない。外貨がなければ、また人民元を発行して、闇で公定の四～五倍の人民元で外貨を買う。これは外貨調整センターと言って、深圳や上海で行われていることである。

そうすると、通貨は対前年比三〇パーセント近くも膨脹しているので、インフレどころではない。スーパーインフレと言ってもよい。ちなみに、この一月から三月までの第一四半期のインフレ率は二八パーセント。それも、この二八パーセントというのは言わば公定価格の指標で、自由市場の価格は入っていないわけであるから、全体としては五

〇～六〇パーセント、品物によっては去年の倍、一〇〇～二〇〇パーセントのインフレである。

たしかに、毛沢東体制から離脱して、経済は活性化した。もともと中国人社会は、地縁・血縁のネットワーク社会で、そのなかで物を移動させているのだから、その意味では活性化したけれども、別の見方をすると全中国が闇市経済になってしまった、とも言える。すると、そこでうまく稼げる人、儲ける人が出てくる。もともと中国人は、平等な競争原理のなかでマネーメイキングをすることについては寛大だった。にもかかわらず、いまの中国では幹部の子弟とか、外国企業と癒着した人たち、高級ホテルに入れる人たちだけが儲けている。大学を出ても、きちんとした企業に勤められるわけではない。コネがなければダメなのである。こういう社会がいい社会であるはずがない。

私はずっとそういう目で中国を見てきた。だから、どこに火をつけても燃え上がるのではないか、と思っていた。もし中国でみんながみんな経済に満足して豊かになっていたのだとしたら、このような事態が起こっただろうか。

その観点で政策論を論ずれば、趙紫陽型の急速な自由化よりも、陳雲路線によるところの縮小均衡で、枠組みを守りながら少しずつ自由化していくという選択肢がありえたと思う。しかし、鄧小平の鶴のひと声ですべてが決まるという体質においては、そうした開放政策のなかで広がった水平的な意識、開かれた意識に対して、縦から押さえつけようとする力が働くのは、どうしようもないことであった。

武力鎮圧の衝撃

こう見てくると、今回の事態は中国の行方を予測させるのではないだろうか。一連の行動を通じて、そこにはいろいろな特徴があると思う。

まず、民主化の波が北京だけでなく、あっと言う間に全国に広がっていった、ということがある。上海、西安、成都、ハルビンと、いたるところに民主化の運動が進んでいった。ほんのひと握りのものが操ろうとしたら、こうはいかなかったであろう。それほど、中国社会に対する欲求不満が大きかった、と言える。

第二に、この運動の波が海を越えて国境を越えて、香港にまで、さらに海外各地にまで波及したことである。香港の五五〇～六〇〇万の人口のうち、二〇〇万人がデモに参加した。これは大変なことである。もともと香港の人たちは明日のことを考えない。その日暮らしで、お金が儲かればいいという意識が強かった。〝いざとなったら、逃げ出せばいいさ〟という考えだったと思う。その人たちが、八年後に香港が中国に回収されるということから、「今日の北京は明日の香港」と考えて、はじめて明確な政治意識を持って立ち上がった。いわばはじめて植民地根性を脱した、ということである。

これは非常に大きな意味を持っている。今後も中国が恐怖政治をつづけていけば、イギリスのサッチャー首相も非常に強い姿勢で批判しているので、香港の将来についても考え直すべきだ、という意見が出てくる可能性もある。また、立ち上がった人たちがいまの中国を見て、「中国には戻されたくない」と言い出して、政治的な運動を起こす可能性も否定できない。英中交渉は、香港の住民の意思を素通りしてサッチャーと鄧小平が決めたものなのだから……。

さらに〝祖国はこれでいいのか〟という切実な気持ちが、東南アジアの華僑社会にも広がっていったことがあげられる。

台湾はどうか。台湾はたとえば文化大革命のときは〝あれは共産主義の国の災害だ〟と冷眼視していたと思う。本来ならば、今回もここぞとばかりに反共宣伝をすればいいのに、もうそんなことは言っていられない。むしろ、〝自分たちの同胞が気の毒だ〟ということになった。いまの台湾は李登輝総統という大変開明なステーツマンの下に、経

公開講座のご案内

当研究所では活動の一環として、当大学の学生、OBならびに一般の方々を対象にした公開講座を開講致しております。

今回は左記のテーマで講座を開きます。

記

- テーマ　国際航空ショーと米ソ欧の角逐
- 講　師　鍛治壮一氏（航空評論家）
- 日　時　平成元年九月二九日（金）午後二時～四時
- 会　場　拓殖大学茗荷谷校舎　E館　四階四〇一教室（地下鉄丸ノ内線　茗荷谷駅　徒歩三分）
- 参加費　二〇〇円
- 問合せ先　〒112　東京都文京区小日向三-四-一四　拓殖大学海外事情研究所　☎（九四七）二二六一　内線一四七四

済的にも大変発展しているし、政治改革も進んでいるので、そういう余裕があるのだと思う。ここにも従来とは違った意識が出てきたのである。

また、東京の学生についても、台湾からきたものも、香港からきたものも、大陸からきた学生と一諸になってデモに参加している。そこには、かつてのような〝おまえは台湾〟〝俺は香港〟〝彼らは共産主義の国の人〟という区別は感じられない。一種の一体感が出てきた、と言っても良い。横浜の中華街でも、またニューヨークでも、パリ、ロンドンでもと、民主化への連帯の輪が全世界に広がっていった。まさに新しい中国人のヨコ社会的なニュー・ウェーブが全世界に拡大していった、ということであろう。

これははじめてのことではないだろうか。私は、こうした水平的な広がりのニュー・ウェーブが、今後の中国にいろいろな意味で大きな影響を与えると思う。当面は、中国の指導者は誰がなんと言おうと「毒食わば皿まで」で盲目的に突っ走っているが、将来の中国に思いをいたすときに、この動きは中国社会を作り替える方向に働くのではないだろうか。

さらに、学生たちの間から、あるいは今度の民主化に立ち上がった人たちのなかから、たとえばチベット問題への関心も大いに出てきていると思われる。世間ではあまり気づかれていないようだが、チベットには相変わらず戒厳令が施かれていて、大変な抑圧状態にある。従来の中国人だと、自分たちの民主化は求めても、ことチベット問題については「あれは漢民族が統治しなくては」と言っていた。ところが、その人たちがはじめてチベット人のことを意識することになって、将来の中国を共産党の独裁体制を作り替えるなかでチベット人のことも考えなくてはならない、とようやく思うようになってきた。

鄧小平の明日がどうなるかわからないが、いまの強権体制がこれからさき五年、一〇年ももつとは思えないので、こうしたニュー・ウェーブが中国の将来に希望をもたらしつつある、と言えよう。

わが国の対応は正しかったのか

最後になったが、こうしたなかで日本はどうしたら良いか——。私は、宇野政権の対応は非常にまずかったと思う。そもそも宇野さんは就任早々、「日本はかつての戦争責任があるので、アメリカなどとは同一行動はとれない」と言っていたが、これはまったく次元の違う問題である。われわれはなにも血塗られた政権に負い目はないし、本当に日中友好が大事ならば、学生たちが虐殺され、中国のイメージがとりかえしのつかないほど傷つくかもしれないというその前に、なぜ最大の外交努力をしなかったのだろう。それは内政干渉などでは決してない。

日本は経済的には中国と一番密接な関係にあるのだから、外交的にも「こんなことをしていたら、日中関係もズタズタになるし、あなたがたのためにもなりませんよ」となぜひとこと言えなかったのか……。リクルート事件でそれどころではなかったと言ってしまえばそれまでだが、では外務省はなにをしていたのか。はじめから学生たちの運動を過小評価して、大したことにはならないと思っていたのだ。こうした対中姿勢、基本的には日本の「対中国位(くらい)負け外交」の嫉晴性が問われた、と言っても良いと思う。なにか中国に言われたら、すぐに頭を下げて、借款を増やしてその場を糊塗するというパターンでは、日中関係はもはや立ちいかなくなっているのである。

いまやわが国は、中国の広範な人びと、民主化に立ち上がった学生、知識人や留学生たちからも、非常に不信感を持って見られている。また、西側諸国からも〝一体日本はなにをしているのか。経済がよければ民主や人権などはどうでもいいのか〟と、根本的な姿勢を問われている。

三番目に、サミットを間近に控えて、西側の一員として少しは同調しなければならないので、第三次円借款は凍結するとは言っているが、いまさらそんなことを言っても遅い。そんなことをしたら、今度は李鵬・鄧小平らから恨まれる。いわば三重の意味で、日本外交は後手後手に回っている。ここのところを私たちはよく考えなければならないと思う。

(なかじまみねお・東京外国語大学教授)

●本稿は、本年六月二三日に行われた当研究所公開講座における筆者の講演を整理したものである。なお、筆者は今回の事件に関して、『中国の悲劇』(講談社)と題する新著を刊行されたので、是非参照されたい。(編集部)

JOURNAL OF WORLD AFFAIRS
ISSN 0453-0950
昭和28年11月27日第3種郵便物認可　昭和31年1月14日　JR特別承認雑誌第3168号
平成元年9月5日発行　毎月1回5日発行　第37巻第9号

海外事情 1989 9

拓殖大学海外事情研究所

特集・ゴルバチョフ訪中と中国変動

●
ゴルバチョフ訪中と最近の中ソ関係——岡田　昭
●
中ソ対立とその収拾の史的経緯——野村　進
●
中国の悲劇とその背景——中嶋嶺雄
●
人民解放軍とはなにか——伊達宗義
●
中ソ接近とASEAN——松井和久
●
チベット問題入門(中)——酒井信彦
●
FSX問題と日米関係——仲田　剛
●
中国の石油産業——中嶋誠一

海外事情〔平成元年9月号〕目次

特集＝ゴルバチョフ訪中と中国変動

ゴルバチョフ訪中と最近の中ソ関係……岡田　昭　2
中ソ対立とその収拾の史的経緯……野村　進　19
中国の悲劇とその背景……中嶋嶺雄　42
人民解放軍とはなにか……伊達宗義　58
中ソ接近とASEAN……松井和久　67
＊
チベット問題入門(中)……酒井信彦　85
FSX問題と日米関係……仲田　剛　98
中国の産業●中国の石油産業……中嶋誠一　120
＊
ニュースレター／東ドイツ　84
研究紹介／中国　82